

語用論研究の在り方：電話会話における断りの展開を例に

川手一ミヤジェエフスカ 恩
テンプル大学ジャパン

0. はじめに

日本語教育において、語用論レベルでの適切な指導をしていくためには実態を正しく把握しておく必要があると考えられる。そのためには適切な方法で実態調査をして教材開発の基となる理論を確立しておく必要がある。本稿では、発話行為のひとつである「断り」に焦点をあて「依頼-断り」の自然な会話の流れの中で発話行為を研究することがいかに大切であるかを考えてみた。

多くの発話行為の中でも最も複雑なものであると考えられる「断り」は、実際の会話では一回の返答で「断り」が成立するという事は珍しく、通常、何回ものターンをくり返してやっと成立しているようだ (Kawate-Mierzejewska, 2001a; 2002)。例えば、なにか依頼を受けた時できないとわかっていてもその内容など、更に詳しい情報を要求することもあるようだ。また、すぐに断るのではなく「うーん」とか「そうですねえ」などの緩衝表現を使い、間をおいてから本題の断りに入ったり、断る前に理由を必要以上に延延と述べたり、代案を提案したり、「次回は必ず。。」という約束をしたり、というようにいろいろな方略を組み合わせて、何回ものターンを使って断りを行っているようである。

さて、このように実際の会話の中で「断り」を考察してみると例えば、語用論研究で使われてきた「談話完成テスト(Discourse Completion Test)」では「断り」という発話行為の解明には限界があるのではなかろうかという疑問が生じてくる。そこで本研究では従来、発話行為の研究に使われてきた調査方法を再検討し、実際の資料を基に自然な会話の流れを通しての発話行為の研究がいかに大切であるかということの立証を試みた。

1. 先行研究と目的

「断り」の研究ひとつをとってもいろいろな調査方法が使われてきているようだ。例えば、Hartford & Bardovi-Harlig (1992)は自然会話によるデータと談話完成テストで収集したデータを較べて、日本語母語話者、非母語話者にかかわらず自然会話によるデータの方が「断りの方略」(Refusal Realization Strategies)の種類が豊富で、長いインターアクションがみられたと報告している。また Bardovi-Harlig & Hartford (1993)は、二つの異なるタイプの談話完成テスト、つまり状況説明だけを与えたものと談話形式で状況を与えたもの、を較べてどちらのデータも断りの方略の種類は似ていたが談話形式で収集したデータの方が長くて自然に近い返答をしていると報告し、談話形式で状況を与える談話完成テストの方が発話行為の研究には適切であると指摘している。Sasaki(1998)は、談話完成テストとロールプレイのデータを較べて、ロールプレイで収集したデータ

の法が長く方略の種類も多様であったと報告している。また、研究方法により使われた方略の種類が幾分異なっていたとも報告し、同一人物でも研究方法により返答の仕方が異なるようであると述べている。Kodama(1996)も談話完成テストとロールプレイのデータを収集しどちらのデータからも交渉の様子が伺えないのでそれらのデータ収集方法では自然会話を反映できないと述べている。また、Beebe & Cumming (1996)は談話完成テストと電話会話によるデータを比較して、談話完成テストでは自然会話の特徴を描写することはできないが「断り」の一般的なパターンのようなものを考察することはできると報告している。他方、電話会話の方は発言の量という点においては自然会話を反映していると述べている。Turnbell(1995)によればロールプレイ、電話会話の SCRIPT、自然会話では似たようなデータが収集できるという。したがってその中で調査条件を統制できる電話会話の SCRIPT が発話行為の研究に一番適していると述べている。

以上、従来使われている調査方法の長所や短所を考察してみたが調査の目的に合わせて、適当な調査方法を選択することが大切となってくるようだ。つまり、「断り」という発話行為の実態をいくつかの条件統制をした上で調査するには、SCRIPT のない電話会話のデータを収集してみるのが最も適した調査方法であるように思われる。そこで、本稿では北米英語を母語とする日本語話者の使う「断り」を例にとり、会話のながれにおける発話行為の研究の重要性を考察してみる。

2. 研究事項

「依頼」に対する最初の返答が「承諾」の表現である時の会話はどのように展開するか。

3. 研究方法

3-1 被験者

東京周辺に住む北米英語を母語とする女性日本語話者 10 人(英語教師、大学院生)がこの調査に参加した。参加者は日本に 10 年以上居住し、日常生活では日本語を使い、日本語には堪能であった。依頼者とコーダーは東京周辺に住む日本語を母語とする 3 人の女性(英語教師、翻訳家、日本語教師)であった。

3-2 研究手順

一人の日本語母語話者が北米英語を母語とする日本語話者一人一人に電話をかけて、友達との日本語での電話の会話を録音してくれるように依頼している会話を録音した。実際にはそれぞれの会話は 10 から 15 分で、会話開始部の談話(挨拶、依頼者の自己紹介、録音承諾の再確認)、対話者の背景的情報、「依頼-断り」の談話、異なる依頼、参加者からの電話会話のリサーチに関するフィードバック(全ての会話ではない)、それから終了部の談話(感謝、電話をきる時の挨拶)などからなった。対話者(依頼された人)は、依頼者の友人の友人で同等の立場の関係であった。

3-3 データ分析

データ分析にあたっては、発話行為を会話の流れの中で理解するために会話分析

A: ええ。外からこうあのう録音するのはあのうできないんですけどねえ。(言い訳)

例1では、Aはステージ1で暗示的依頼を承諾したかのようにみえたのに次のステージでは情報を要求して依頼への即答を避けている。そして最後のステージでは承諾できない理由を説明したり言い訳をして依頼を最終的に断っている。

例2 (日本人母語話者=J、北米英語を母語とする日本語話者=A)

ステージ1 -省略-

J: 。。。テープにとって下さる方はいらしゃらないかと思ひまして探しておりまして、
(暗示的依頼の一部)

A: あああああはいはいはい。(省略) それ、か、かまわないですよ。(承諾)
(省略)

ステージ2

J: テープにとってはいただけないでしょうか。(依頼公式を使った依頼[典型的依頼]の一部)

A: 友だちと(省略)話している時のことを録音するってことですか。(返答の遅延)
(省略)

ステージ4

J: あまりない? (情報要求)

A: (省略) だから参考になるかどうかあのう資料として私が適当、適切かどうかちょっと
わかんないんですけど。(言い訳)

J: そうですか。

A: ええ。外からこうあのう録音するのはあのうできないんですけどねえ。(言い訳)
(省略)

最後のステージ

J: ああああああそうですか。あのう電話が好きじゃないとかそういうことはありますか?
(情報要求)

A: (省略) そのぐらいだった、まあその時にだったらまあちょっと努力して友達にはっ
はっはっ電話かけてもいいかもしれないんですけど。(今後の承諾の可能性)

J: そうですか。

例1では、Aはステージ1で暗示的依頼を承諾したかのようにみえたのに次のステージでは情報を要求して依頼への即答を避けている。そしてステージ4では理由を説明したり言い訳をして承諾できないことを暗示し、最後のステージでは今後の承諾の可能性をほのめかして結局、依頼を断っている。

図1からもわかりように、方略をステージ別に考察してみると、ケース1では、ステージ1で承諾しステージ2では返答を遅らせてから言い訳をしてステージ3でも断るための言い訳をし、最後のステージでも言い訳をしたり理由を説明し、結局、断っている。ケース2では、ステージ1で承諾しステージ2では返答を遅らせステージ3と4では断りのための言い訳をしたり理由を説明し、最後のステージでは今後の承諾の可能性を提供し結局、断っている。どちらのケースも最初は承諾したのに「依頼・確認」

図1 方略でみた会話のながれ

	ケース1	ケース2
ステージ 1	暗示的依頼 承諾	暗示的依頼 承諾
ステージ 2	典型的依頼 返答の遅延 言い訳・理由	典型的依頼 返答の遅延
ステージ 3	情報要求 言い訳・理由	情報要求 言い訳・理由
ステージ 4	情報確認 言い訳・理由 言い訳	情報要求 言い訳・理由
ステージ 5	N/A	情報要求 今後の承諾の可能性

—「返答」を繰り返し何回ものターンをつかって結局、最終的には断っている。

5. まとめと考察

「依頼—断り」の談話では、依頼にたいする最初の返答が「承諾」でも「依頼・確認」—「返答」を繰り返し何回ものターンをつかって、最終的には断ることもあるということがわかった。つまり、最初の返答で依頼を受けてもらえたと解釈するのはまちがえで、会話の最後までいかないと依頼に対する本当の返答がわからないというわけである。これより、「断り」という発話行為は「依頼—断り」の会話のながれにそって考察してみないと実際の会話を反映する実態の調査はむずかしいことがわかり、会話の展開に注目した発話行為の研究がいかに重要なことであるかがわかった。したがって、談話完成テストなどでは、対話者（依頼をされた人）の最初の返答しか考察できないので、実態を反映するデータの収集はむずかしいということになる。また、ロールプレイなどでは、このような承諾から断りへと変わっていくような予期せぬパターンのおそらく観察できないであろう。

6. おわりに

以上、承諾から断りへと移行する予期せぬパターンの「依頼—断り」の会話に焦点をあて、断りの実態を調査する時は「依頼・確認—返答・断り」の繰り返しからなる会話の展開を分析していくことが重要であると再確認された。今後の課題として、会話の中での発話行為の研究をするにあたって会話のもつ音声的な特徴など（例えば発話のトーンやイントネーションや強弱）をも考慮していく必要があるだろう。また、言語以外の顔の表情や動作などの研究も大切であろう。

参考文献

- (1) Bardovi-Harlig, K., & Hartford, B. S. (1993). Refining the DCT: Comparing open questionnaires and dialogue completion tasks. In L F. Bouton, & Y. Kachru (Eds.), *Pragmatic and Language Learning*, Monograph Series, vol. 4 (pp. 143-61). Urbana-Champaign, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign, Division of English as an International Language Intensive English Institute.
- (2) Beebe, L. M., & Cummings, M. C. (1996). Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In S. Gass & J. Neu (Eds.), *Speech acts across culture* (pp. 65-86). Berlin: Mouton de Gruyter.
- (3) Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in second language* (pp. 55-73). New York: Newbury House.
- (4) Clancy, M. P., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 335-387.
- (5) Gass, S. M., & Houck, N. (1999). *Interlanguage refusals: A cross-cultural study of Japanese-English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (6) Gumperz, J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (7) Hartford, B., & Bardovi-Harlig, K. (1992). Experimental and observational data in the study of interlanguage pragmatics. In L F. Bouton, & Y. Kachru (Eds.), *Pragmatic and Language Learning*, Monograph Series, vol. 3 (pp. 33-52). Urbana-Champaign, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign, Division of English as an International Language Intensive English Institute.
- (8) Kawate-Mierzejewska, M. (1999). Back channel cues as sources for conversation breakdowns and misunderstandings. In Jungheim and Robinson (Eds), *Pragmatics and Pedagogy: proceedings of the 3rd Pacific Second Language Research Forum, Vol 2*, 25-34. Tokyo: Pacific Second Language Forum.
- (9) Kawate-Mierzejewska, M. (2001a). Goyoo-ron reberu de no chuukan gengo: Nihon-go ni okeru kotowari no hooryaku to koozoo (Interlanguage pragmatics: the interactive nature of refusal strategies in Japanese). *Proceedings of the 12th International Conference on Japanese Language Teaching at Leiden University in Netherlands 1999*, 36-41. Aichi, Japan: Foreign Language Department, Aichi Prefectural University.
- (10) Kawate-Mierzejewska, M. (2001b). Different types of acceptance sequences in conversational discourse. *Proceedings of the 3rd Annual Conference of Japan Society for Language Science, JSLS 2001*, 73-78.

- (11) Kawate-Mierzejewska, M. (in press). *Refusal interactions in conversational discourse*. Doctoral Dissertation. UMI dissertation service, Michigan.
- (12) Kodama, N. (1996). *Refusals in Japanese: Oral and written alternatives elicited by discourse completion task and role play* [CD-ROM]. Abstract from: ProQuest File: Dissertation Abstracts Item: 9622009.
- (13) Okamoto, S (1991). Expressions of request in Japanese language: requestees' Considerations for requestees' costs. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 31(3), 211-221.
- (14) Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.
- (15) Sasaki, M. (1998). Investigating EFL students' production of speech acts: A comparison of production questionnaires and role plays. *Journal of Pragmatics*, 30, 457-484.
- (16) Sacks, H. (1973). *On the preference for agreement and contiguity in sequences in conversation*. Paper presented at the Summer Institute of Linguistics, Ann Arbor.
- (17) Schegloff, E. A. (1972). Sequencing in conversational openings. In J. Gumperz & D. H. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics* (pp. 346-80). New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- (18) Szatrowski, P. (1993). Nihon-go no danwa no koozoo bunseki: Kanyuu no sutoraregii no koosatsu [A conversation analysis of Japanese requests]. Tokyo: *Kuroshio Shuppan*.
- (19) Tsui, A. B. M. (1994). *English conversation*: Oxford: Oxford University Press.
- (20) Turnbull, W. (1995). *An appraisal of pragmatic elicitation techniques for the study of social factors in language use*. Unpublished manuscript, Simon Fraser University.
- (21) Weizman, E. (1988). Requestive hints. In S. Blum-Kulka, J. House, & G. Kasper (Eds.), *Cross-culture pragmatics: Requests and apology* (pp. 71-95). N. J.: Ablex.
- (22) Verschueren, J. (1995). Interactional sociolinguistics. In J. Verschueren, J. Ostman, J-O, & J. Blommaert (Eds.), *Handbook of pragmatics: Manual* (pp. 336-337). Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.

APPENDIX A

- 。。。 省略
- (0. 0) 1/10 秒で示した沈黙の長さ
- ? 上昇のイントネーション

APPENDIX B

依頼者のイニシエーションを構成する意味公式の分類

1. 暗示的依頼 (implicative request: 依頼をほのめかす)
2. 依頼公式を使った依頼・典型的依頼 (conventional form: 例: ... して下さいますか。 ... していただくわけには参りませんか。 ... してはいただけませんか。)
3. 交渉としての情報要求 (request for information used as part of negotiation)
4. 交渉としての情報確認 (request for confirmation of refusal used as part of negotiation)

APPENDIX C

断りの方略

1. 言い訳・理由・説明(excuse)
2. 今後の承諾の可能性(promise of future acceptance)

承諾の方略

1. 承諾(acceptance in general but giving no details: 例: いいですよ。)

遅延の方略

1. 情報要求 (request for information: 例: それ電話じゃないとだめですか。)